

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第30号 1999年1月1日

寺石正路の考古論文・報告

まさみち

高知県文化財保護審議会委員 岡本 健児

寺石正路（明治11～昭和24年）は、その生涯に22篇の考古論文・報告を残す。うち、『東京人類學會雜誌』に13篇、『考古學會雜誌』『考古』『考古學雜誌』（3誌は改名に次ぐ改名で同一誌としてよい）に7篇、『土佐史壇』に1篇、『史蹟名勝天然記念物』に1篇で、『土佐史壇』以外は中央学術誌である。寺石の最初の考古論文は明治21年の『東京人類學會雜誌』3・24に「土佐國長岡諸村塚穴」、それに続く「土佐國長岡郡塚穴」を3・29に掲ぐ。当時の人類学は考古学、自然人類学・文化人類学（民俗学も含む）と幅広い。寺石の発表した民俗の論文は12篇である。翌22年の同誌5・46に「渦紋土器ノ製法」と「土佐ニ於ケル銅鐸銅鋒所在地名」を掲載す。前者は卓越した論文で須恵器内面の渦文の施文具を明かにする。23年には5・49に「豊後國古墳發掘一覽表」、5・50に「土佐ノ石器二」、5・53には「九州ノ貝塚」、6・55には「考古雜録―祝部土器ノ小孔」を掲ぐ。豊後國古墳は横穴二基、横穴式石室墳四基を報じ、一基を除いて人骨が存し、横穴式石室墳には石棺が残存す。土佐ノ石器二は東津野村船戸の

早期の石鏃、吾桑（須崎市）出土の銅劍形石劍を紹介す。九州ノ貝塚は熊本県曾畑貝塚、福岡県木月・楠橋両貝塚の發掘の記録で、この経験が翌年の宿毛貝塚と平城貝塚の發見に繋がる。また、祝部土器の小孔は水差しの口とする。24年の6・64に「土佐國安喜郡ノ銅鐸、同國吾川郡ノ銅鋒」、7・67に「四國島貝塚ノ發見」を掲ぐ。前者は新出土の伊尾木銅鐸、波介の銅矛を報じ、後者は四國での初めての縄文貝塚（平城、宿毛貝塚）の發見と發掘について記す。25・26年の8・81・8・83・8・84と連載で「支那銅器時代考」「支那銅器時代考材料」と題す論文を發表、扁鐘と銅鐸、日中の銅劍・銅矛・銅戈の比較など先駆的な論文である。その故か本論文は全て巻頭論文で、先述の「渦紋土器ノ製法」も同様である。また8・82「穴居考材料」を掲げ、特に天然の洞穴が住まいとなる例を掲げ、古墳横穴を穴居とする意見を批判している。当時の寺石は全国でも著名となり、この26年には東京人類學會全国5名の地方委員に推薦される。明治29年12月以降、寺石の論文は新誕生の考古学の機関誌『考古學會雜誌』に移る。

それまでの寺石の考古学は古墳時代以前の研究を主としていたのに、以後に例外はあるも専ら歴史考古学を対象とする。その最初の論文は、明治29・30年の同誌1・1・2に連載した「獅子圖形傳來考」である。わが国にみられる獅子圖形の成立を中日の文献から、その源を西域―ペルシアとする。本論文の執筆は父可成が石州流の茶人であり、石州流では茶入を入れる仕服、濃茶の席で茶碗をのせる古帛紗に法隆寺に残る獅子狩文錦の複製を石州好とする。この獅子狩文の裂をみて寺石の心が動いたとみる。30年の1・3にも「霧島山天逆鉾考」を發表、天逆鉾を道仙家（修験の事）の寄進と寺石は解く。さらに1・9に「日本古代通貨の起源」を發表、和銅開珎鑄造前の社会とその鑄造、その流布を論ず。31年の2・5には、「土佐國國府の遺跡」を掲載、寺石は土佐國司の館を「タイリ」と呼ぶ地とし、付近から布目瓦等も検出するといふ。館の東二丁に柱穴とその中の小穴の存す礎石も残り、土佐國分寺境内の小祠台石にも同種の柱穴を持つ礎石もあるとする。さらに、比江廃寺・土佐國分寺の礎石（実は心礎）は柱穴があるが、太宰府のそれは柱穴でなく凸起円形でそれらの違いを論じていて、寺石が心礎の型式分類の出発点にまで到達していた事が判る。2・

企画展

『土佐郷土史の父 寺石正路の足跡』によせて

— 寺石 可成・正路の教養 —

野本 亮

本稿では、著名なる郷土史家寺石正路を愛しみ、幼少期より学問・文芸の世界に導いた父可成を中心に、寺石親子の教養について考えてみたい。

寺石正路については、これまで多くの事典類においてその略歴が紹介されている。しかし、父可成を詳述したものは見当たらない。これは可成に関する第一級資料が公開されていなかったことに起因する。当館所蔵の正路関係資料のなかに、『燈下與児談』という自叙伝があるが、そのなかには敬愛する父可成の姿が子息正路によって活き活きと、そして詳細に描かれている。

この伝記によると、寺石可成は旧名を繁次郎といい、潮江村高見の隣の塩屋崎に住んでいたが、のち九反田に転居している。竹馬の友としては、今井貞吉・森脇惟一（もと土佐勤王黨員）・岡内俊太郎（もと海援隊士）・吉永良吉・大久保活之助などがいた。若い頃土佐藩の下横目として参勤交代に随行し、七回ほど京・大坂・江戸に旅したことがあった。それ故、当時としては

10にも「根來寺ト粉河寺」の論文を掲げ、両寺の歴史・伽藍・宝物等を詳述し、両寺の比較に及ぶ。33年、『考古』1-2に「諸國古塔材料」と題す論文で滋賀県蒲生町石塔寺石塔、高野山奥の院塔、熊本市蓮台寺檜垣石塔について見解を述べる。石塔にも目を向けた寺石の歴史考古学研究的幅広さを知る事が出来るが、明治における歴史考古学研究はこれを以て姿を消す。ただ、突如明治36年の『東京人類學雜誌』19-216・217に連載で「九州極南に於ける古墳并遺物」の巻頭論文を発表、特異な地域の古墳に注目し、それを対象に詳述する。そして、本土の古墳と変わらぬとする。ただ、この論文の九州極南の地は日向・肥後の南部に重点を置き、大隅・薩摩の地は除外される。当時としては、その地の調査は無理であったのであろう。

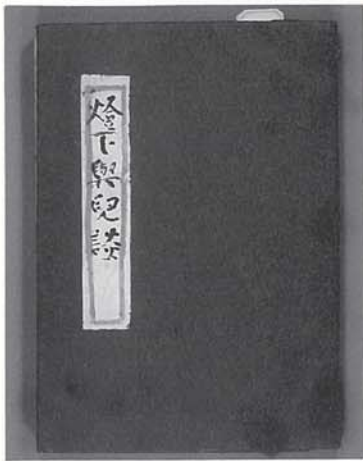
寺石は大正3年、『土佐偉人伝』を皮切りに陸続と大正6年創刊の郷土史機関誌『土佐史壇（談）』に郷土史の論文を投稿する。明治36年の考古論文以降、大正3年までの間学術論文の空白は寺石の郷土史研究の準備期間とみてよい。そして郷土史学者への転向後も次の三篇の考古論文をみる。大正4年沼田頼輔（当時山内家家史編纂所主任）の「鰐口の研究」（『考古学雑誌』5-12）が発表され、その中に高岡町

（土佐市）天崎権現の応和三（九六三）年銘鰐口は、年代的に古過ぎると疑問の鰐口とされた。これに対し寺石は同年の同誌6-12に「寛平六年の鰐口」と題し、福岡県内には応和より古い寛平六年（八九四）の鰐口が存すと反論するが、同誌6-13で沼田は「寛平六年の鰐口に就いて」と題し、天崎の応和三年銘鰐口を実査し、当鰐口は応永三年（一三九六）の紀年銘と読むべきとされ、寛平三年銘の鰐口銘も疑わしいとされた。なお、今日わが国で最古の鰐口は長野県松本市出土の長保三年（一〇〇一）銘のものである。そして、大正六年には『土佐史壇』発刊号に「考古學上から見た土佐」と題す論文を掲ぐ。これは寺石の講演を活字化したもので、この時点での寺石の土佐考古学の総括である。それから14年後の昭和6年8月15日香美郡佐古村（土佐山田町）龍河洞洞内から多くの完形弥生土器が発見された。寺石は早速その翌日に入洞し、調査の結果を同年二月史蹟名勝天然記念物協会が刊行する『史蹟名勝天然記念物』16-11に「土佐龍河洞石灰洞古代穴居遺跡発見」と題して発表した。これは、寺石最後の考古論文である。そして、昭和14年土佐考古学会が発会し、寺石はその会長に推されるが、機関誌『土佐考古』は未完のままである。

（敬称略）

雅の人、趣味人であった。「燈下與児談」上巻より原文を紹介する。

「…余が父は器用な多芸な人であった。一寸大工もした。箱を差す、火鉢を造るなど手に入ったものである。又料理が上手で、宴会の肴はいつも自分に(て)調理せられ、刺身汁物組物何でもやられた。又画も橋本小霞翁に習ひ、一寸書かれた。琴即一絃琴は島村三四郎安孝翁、彼の天満宮樓門の鳳凰(を)刻んだ名人に学ばれた。春の弥生より越後獅子まで、甚だ巧妙なものであった。余が家には今に島村翁の刻した一絃琴が保存してある。然も尤も余が父の執心せられ、生涯の修業とせられたは茶道であった。小高坂村西町の茶道宗匠、上村如山翁の門に入り、石州流茶道を学ばれ、初伝・中伝を受け、上村氏没後、加賀野井彦魚大人につき、遂に皆伝を取られた。同流の茶道で、常に往来した宗匠株の方々は、左の通りであった。



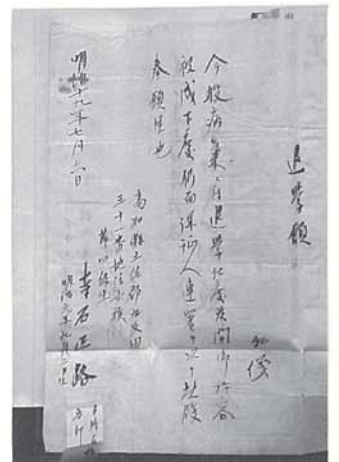
通町 西村克太郎、唐人町 足立貞長、潮江 井上壽櫟、和食 野崎馬五郎

又挿花は、池坊流を学ばれ、是又皆伝を取て居た。盆景も中々上手で、江島とか高師濱などの風景は、尤も好んで打たれたことであつた。発句は格別師承といふことはなきも、独学にてやられたが、徳弘其舟、横山籬外の両翁とは、尤も親しく交際し、常に其批評をうけて居られた。のち明治三十年頃のことであつた。蓮池町浅井家の大寄で、二萬首の句中、尾崎五菖翁の撰を以て第一等秀逸の點を得て大に面目を施された事がある。其句は、「野分に動かぬ松の一木かな」五菖翁の賛には平安城近しとあつた。其他漆塗も上手で、春慶塗などは名人であつた。尚父は篆刻も上手で、余が印も二三顆刻し下つたものが今に存して居る。詰り人のする藝は何でも出来た。されど其一生の主藝は茶道であつて、後には数多の弟子を取つて、之を指導せられ、雅号は古竹庵風外といった…。(文章は一部要約した)

友、そして風雅の友であつた。

明治一二年、可成は南街小学校を卒業した正路を伴い、遠隔地に旅に出た。九泊十日の京阪神旅行である。幕末、参勤交代に随行したときの道程を使用したものと考えられる。この長旅で、少年正路は初めて蒸気船や蒸気車に乗り、近代化しつつある国内情勢をその眼に焼き付けた。この旅で得た感動と父に対する感謝の気持ちは、生涯彼の心に深く刻まれることになる。また、正路が小学校を卒業する前後、可成は民権政社「修立社」(中浦戸町真宗寺西側)の準社員として正路を入社させている。これらはいずれも子息正路の社会的・政治的視野を広げるための配慮だったと考えられる。

明治一三年、正路は旧藩主山内家が設立した海南私塾分校に入学した。恐らく父の意向であつたろう。しかし、同校が軍人養成中心のカリキュラムになるに及んで、同一五年一旦卒業する。その後は課外生として英語を学び、同一六年に全課程を終えた。この一連の進路変更は父の意向ではなく、「…然りながら余は性質軍人を好まず…」(「燈下與児談」という正路自身の意志によるものであつた。その後自ら学問によって身を立てる決心をした正路は、父を説得、翌年ついに上京を果たす。そして神田共立学校(のちの開成



学校)から大学予備門(のちの第一高等中学校)へと進学するものの、脚気と胃腸を患い帰郷、退学する。父の膝下を離れ、高々と掲げた青雲の志は無残に砕け散つた。

しかし、学問に対する情熱は些かも衰えることなく、明治二十年以降、挫折をバネに、考古・歴史地理・民俗等各分野において研鑽を積み、土佐の郷土史を拓いていった。父可成の与えた深い愛情と幅広い教養は、正路の生きる力となり、見事にその才能を開花させる源となつたのである。

註

① 例えば高知市民図書館発行「高知県人名事典」など。

② 高知市役所「高知市史」二六八頁参照。

③ 島崎猪十馬「舊各社事蹟」八九一頁参照。

父「寺石正路」の思い出

大岸 俊 (寺石正路四女)

「俊よ、心配せんでもええぞ」父の声が甦る。父が逝ってもう半世紀近くの月日が経つのだが、薄暗い居間の片隅で小さな机に向かい、まっすぐに背筋を伸ばして筆を動かしているその姿は、今もそこにあるようにありありと思ひ浮かべることができる。

大正三年、私は高知市の下町にある寺石家の四男四女の末っ子として生まれた。その時、父正路は四十七歳。海南学校の地理と歴史の教師であった。

しかし本業はむしろ史学者としての活動にあり、特に土佐史学の研究・講演・執筆等に忙しい明け暮れだった。

共立学校を経て大学予備門に入學したものの、病におかされ止むなく退学し帰郷した父は、病気を克服した後、あらためて郷里で強い意志と興味をもって学問・研究に邁進し、郷土史の集大成を生涯の仕事とした。

末っ子の私はこうした父のもとで姉・兄の誰よりも長く二十七年間起居を共にしたので、その思い出は多い。

父は非常に質素な人で、身に付ける品、使う品はどれも最低のものであった。財布なども私の女学生時代に初めて買った。



正路が晩年まで愛用した硯箱

たほで、それまでは木綿の布を袋に縫って紐を付けた物だった。着物もなかなか買わないので母が難儀して私の姉婚の古い地味な着物を送ってもらい、つぎはぎして着せたりもしていた。とにかく使えるものはどんな物でも捨てないで大切にしまっていた。

着物と言えば、外出の時着物をゆがんで着たり、羽織の紐をかけずに出掛けるのを母が直そうとすると「そんなほつそい(つまらぬ)事はどうでもよい」と母を押しつけるようにして出て行くこともしばしばあった。

父は胃腸が弱かったので健康には特に注意し、規則正しい生活を送っていた。朝早く起きると冷水摩擦、体操を必ずした。食物も質素ではあったが冷たい物、消化に悪い物は食べなかった。お酒も煙草も飲まなかった。甘いお菓子が好物であった。

我家は質素な貧乏世帯であったが、来客は絶えたことはなかった。八歳くらいの頃からお客様を揃えるのは私の役目となった。

畳表付きの下駄をさちと揃えて脱がれるのは旧家のご主人、質素ながら手入れのゆき届いた履物をそろりと寄せられるのはお寺の尼様、無造作に向きだけを変える男客等、子ども心に履物の脱ぎ方ひとつにその人の人となりが出ることを知り面白かった。

躰という点では、父母共に礼儀・行儀・言葉遣い等にはやかましく、体をくずしたり横になることは「病人と老人のすることだ」と言って許してくれなかったし、机でうたた寝でもしていいものなら厳しく叱られたものであった。

多忙で厳格、おまけに末っ子ときていたので、私は父に抱いてもらったり、遊んでもらった記憶はない。ただ父は話上手な人であったので、小さい頃夜ふとんに入っているとたまにやって来て私の脇に横になり、「今晚はお話を

しようか」と言う。そして団扇でバタバタと蚊を追い払いながらいろいろなお話をしてくれた。まだデパートというところへ行ったこともない私を、電気がいっぱいについて美しい、にぎやかな「架空の三越」へ案内し、お菓子やお人形を買ってくれる話に思わず引き入れられ、心うきうき興奮しながらいつの間にか買い疲れ、聞き疲れて眠ってしまうのだった。話は土佐伝説の怖い話の時もあり身を堅くして聞いた。「野根山の狼」「しんびよう」などは今も忘れることがない。

家族が揃った夕食の後などにも、父は時折四方山話をしてくれた。昔の戦国時代の話、旅行の話、世相、人物論などそれぞれに面白く、時を忘れて聞き入ったものである。

学校でも「寺石の話」というのは定評があったらしく、しばしば授業は脱線したようで、その頃の生徒さんが後年書かれた回顧録などにもそうした話が必要出てくる。とりわけ流暢な話ぶりの人ではなかったが、話題が極めて豊富であきさせなかったらしい。

私は一度だけ父の涙を見たことがある。二歳年上の姉が亡くなった時だ。姉は二十四歳で結婚し男の子を一人もうけたが、理由あって子どもを連れ実家に帰っていた。その後子と離れ、次第に衰弱していった姉は二年後に夭逝

した。息を引き取った時、「光子、よ
うよう楽になったね。長い間苦しかっ
たろう」と声をかける父の目に涙が光
るのを、私は初めて見たのであった。
これまでどんな場合でも父は静かに耐
えている人であった。

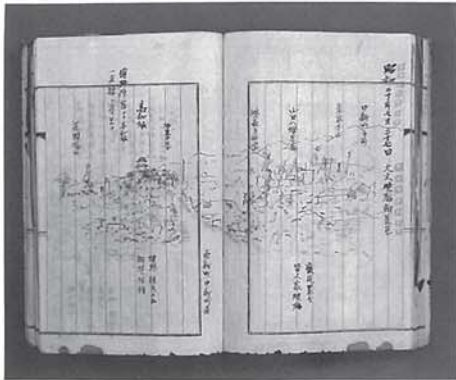
しかし、平素の父は本当に物事に動
じることがなかった。太平洋戦争の空
襲の最中も、父は一度も防空壕へ入ら
なかつた。街へ落ちた爆弾で家が揺ら
いでも、不気味な焼夷弾の音が聞こえ
ても、一人机に座してとつとつと筆の
手を止めなかつた。私達がいくら呼ん
でも「よし、よし」と言うだけで、そ
のままの姿勢を崩さない。今にして思
えば、「もう十年生きられたら、やり
たいことがある」と言っていたのだけ
ら、寸暇を惜しむ気持ちが強かつたの
かもしれない。

高知大空襲の時、私は少し離れた主
人の郷里に疎開していた。高知市の上
空が赤く染まるのを見て、父母二人き
りの身はどうなったことかと案じ、夜
が明けのを待ちかねて実家を訪ねた。
家は無事であった。西隣二軒を残して、
それより西も南も北も見渡す限りが焼
け野原と化していた。門を入っていく
と、父は庭の椅子に腰をかけていて、
「来てくれたかよ。ありがとう」と言っ
ただけで後はまったく普段と変わった
様子もない。母が「昨夜は大変だった

よ。父さんが「自分はこの家を見届け
て逃げるから、お前は先に逃げなさい」
と行って動かない。一人で逃げるわけ
にもいかないから二人で落ちてきた焼
夷弾を消していると、若い人達が手伝
いに来てくれて一緒に消火に走り回っ
たんだよ」と話してくれてやっと状況



父、正路と共に（中央が俊さん）



空襲後の南新町周辺

がわかつた。父としては何よりも大切
な資料・書籍の安否を見届けたい思い
があつたに違いない。この空襲では近
所の知人も数人亡くなったと聞いて、
私は老父母の健在は神様のおかげと思
わず手を合わせたものである。

戦争も終わり、父はまだ見た目には
割合元気そうだったが、自分で体力の
減退、頭脳の衰え、視力の弱退等に気
づいていたのだろう。依頼された仕事
も次々に断り、書庫に入つて整理を始
めた。頂き物の陶器・漆器・置物等を
分けてくれ、何十年も身につけていた
時計も「父さんが死んだらお前にやる
から覚えておいで」と言つて戸棚に収
めたりした。

床に就くようになってからは枕元に
硯箱と日記帳を置いてあつたが、次第
に行数が減り、字の乱れも見られるよ
うになつた。

ある日、ついに医者から「もう長く
はありません」と告げられ、私はどう
しようもない悲しさで胸がいつぱいに
なつた。父の側に行くと、私の気持ち
を読み取つたかのように穏やかな口調
で言つた。「俊よ、心配せんでもええ
ぞ。父さんはいつ死んでもいいという
覚悟はできちよる。たとえ十日でも一
カ月先でもね。死んでもお前達のこと
は必ず守つてあげるから、何も心配す
ることはないよ」私はこらえていた涙

が堰を切つて流れだした。激しい悲し
さが襲つてきたが、同時に一種の安ら
かな思いも心に満ちあふれて、父の胸
に抱かれているような不思議な気持ち
だつた。

父は、大学進学の挫折を潔く思い切
り、強い意志と信念、そして様々な人
達の支援、友情にもあづかりつつ、自
分の選んだ道を父なりに生き抜いた。
満足感を持つ晩年だつたらう。私は父
を立派だと思つた。
父はその一月あまり後に安らかに眠つ
た。

父の影響は大きかつたが、私は怠け
者で気弱い性格のまま人生を送つてき
た。今なお私は苦しい時父を呼び、父
にすがる。



書齋で執筆中の正路

※ この文章は、「父の三越」、「父寺
石正路の思い出」（『海南学校』）な
どの大岸さんの手記と、当館におけ
る聞き取り調査時のお話をもとにま
とめさせていただきました。（野本）

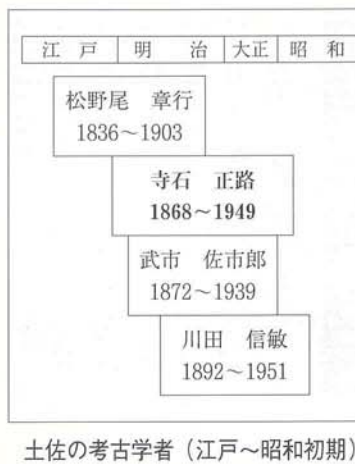
企画展

土佐郷土史の父 寺石正路の足跡

— 寺石正路と考古学 —

岡本 桂典

考古学という学問のなかに「考古学史研究」という分野がある。考古学研究の歴史を研究する一分野である。この分野の辞典に斎藤忠博士著の『日本考古学史辞典』（昭和五九（一九八四）年九月刊行）がある。辞典には、高知県の考古学者として唯一「寺石正路」が項目として載っている。ただ、辞典の刊行の当時「寺石正路」の名前を「てらいしまさじ」と読んでいたため、「てらいしまさみち」となっていない。本来は、「てらいしまさみち」と読むのが正しい。寺石は、明治元年（一八六八）九月二日に現在の高知市九反田に生まれ、昭和二四（一九四九）年二月二三日に享年八二歳で没している。寺石は、郷土史家として著名であるが、考古学者として土佐考古学史に残した業績は大きい。



九〇三）がいる。松野尾は郷土史研究に貢献している。『皆山集』『翠軒抄録』の著作があり、その中で青銅器、古墳、須恵器、寺院跡、古瓦などについて記している。この松野尾章行の後を継いだのが、寺石正路である。寺石は一八八七年以降土佐の考古学界で活躍する。しかし、昭和六（一九三一）年に最後の考古学の論文を記し、考古学から文献史学の方に転じる。次に大正元年（一九一二）から昭和一〇年（一九三五）までの土佐の考古学界を担ったのが武市佐市郎である。武市は古墳と歴史考古学を中心に研究を進める。次に寺石との関係で川田信敏が佐川青山文庫内の考古博物館を中心に研究を進める。以上、土佐の初期の考古学は先述した四人の研究者によって基礎が形造られていったのである。その中で、寺石は四国に近代考古学を導入した先駆者の一人でもある。もう一人は徳島県の鳥居龍藏博士である。寺石は、明治二一（一八八八）年若干二〇歳の時に「土佐國長岡諸村塚穴」（『東京人類學會雜誌』三二（二四））で現在の高知市大津付近の古墳について報告する。寺石の最初の論考である。明治二二年には「土佐ニ於ケル銅鐸銅鋒ノ所在地名」（『東京人類學會雜誌』五一（四六））を投稿する。寺石は、二〇歳から二六歳にかけて『東京人類學會雜誌』に二四回にわたり論考や報告を投稿している。中でも寺石の日本考古学上の業績は、明治二四年の宿毛貝塚と愛媛県平城貝塚の発見である。その報告は、「四國鳥貝塚ノ発見」（『東京人類學會雜誌』七一（六七））として同年に早速論考として発表している。この明治二四年に採集した宿毛貝塚の資料が寺石の資料の中に幸い残っている（第1図）。土器・獸骨には丁寧な注記がなされ、台紙に紐で留められている。さらに台紙にも注記がされている。寺石が採集した考古資料のほとんどは採集地が墨書で注記され、或いは紙に書いて張り付けてある。まさに細かい整理が行き届いている。このことは、考古資料に限らず書籍や寺石宛の書簡文にも言えること

でもある。寺石が採集した考古資料は、縄文時代～古墳時代の資料がほとんどと思われるが、その採集資料は古墳時代以後の資料、つまり古代～中世～近世にまでわたっている。それも県内だけでなく寺石が各地を歩いて収集した資料もある。さらに、鳥嶼や外国の資料までもがコレクションとしてある。これらの資料の中には、現在までその存在が知られていたが、その専門の研究者でも眼にしたことのない貴重な資料も一部含まれている。また、これらの資料から寺石の考古学は、縄文～弥生～古墳時代から歴史時代の考古学（仏教考古学も含む）へと移行していったことが見て取れる。また、寺石の考古資料には当時の考古学者から寺石に宛てられた未公開の手紙類も多く含まれ、それらは表装され整理されている。まるで今日の考古学史研究を意識して残していると思われるところが、寺石の几帳面な性格



第1図 寺石が採集した宿毛貝塚の資料

寺石正路の民俗研究

中村 淳子

が伺われる。また、仏具などの拓本もコレクションの中にあり、現在でも貴重な資料となっている。寺石の考古学上の業績は、実は今まで未調査であった収集資料の中にもある。

平成九年七月一日(金)に五台山竹林寺の調査のため当館を訪れた、日本考古学界の最重鎮の斎藤忠博士(八八歳)は、地域考古学史の重要性を指



寺石に宛られた書簡類を見る斎藤忠博士

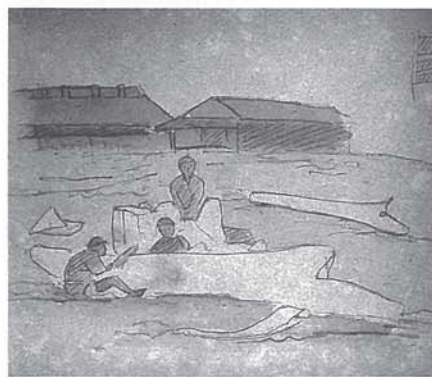
摘されているが、本企画展はその点でも意義深いものである。また、考古学者と郷土史家という二面性をもつ寺石正路を分析することにより新しい側面を見いだすこともできる。

かつて、昭和一六(一九四一)に佐川町城台洞穴遺跡の発掘調査に訪れた東京帝國大學人類学教室長谷部言人博士は、「寺石氏(七三歳)は・土佐考古学界の元老である。」と言っている。寺石は、考古学から文献史学へ移行してからは、土佐の考古学界の重鎮として世間から高く評価されていたと考えられる。

寺石正路は、淡い水彩画のスケッチブックを遺している。その中の一冊に幡多郡窪津の捕鯨場のスケッチがあつて、納屋らしき建物を背景に鋸様の道具で巨大な鯨の骨を切る人々などが描かれている。これらは網取り捕鯨の貴重な記録であり、風光明媚な海辺や静寂とした神社仏閣ばかりでなく、鯨の解体作業などの庶民の姿に向けられた眼差しに、フィールドワーカーとしての寺石の横顔が垣間見える。

考古学者であり、郷土史家でもあつた寺石であるが、民俗関係の論文や報告も数多い。例えば、「東京人類學會雜誌」には「土佐國ノ婚姻」(明治二一年)、「食人風俗ニ就イテ述ブ」・「左衽ノ風俗」(明治二二年)、「タフノ事」・「粥杖ノ事」(明治二四年)、「右得手と左得手」(明治三六年)などを発表している。その中で、「土佐國ノ婚姻」は、新婦の門出に火を焚き死者の如く送る習俗や男子が夜中婦女の家で泊まる習俗などの事例が報告されている。「食人風俗ニ就イテ述ブ」などの論説は、後に『食人風俗史』(大正四年)にまとめられる。究極の禁忌である食人を考察し、寺石の独創性が横溢する。

「左衽ノ風俗」では、左衽に衣を着る風習が、日本の歴史に重要な位置を占めるアイヌにもあると指摘し、それは歴史上関係が深かった中国から伝わったものと見る。次いで、左衽を夷狄の風習とする古書によって中国の中でも蒙古或いは韃靼と呼ばれた人々の風習であるとしつつ、更なる探究が必要で



「幡多郡窪津捕鯨場骨切」
【寺石正路のスケッチ】より部分

あると慎重に筆を置く。寺石は様々な風習を日本固有のものと思わず、中国などからの伝播を考えており、今日の比較民俗学にも通じるものがある。

また、寺石が会長を勤めた土佐史談会の『土佐史談』には、「高知県に於ける妊娠出産育児に関する民俗資料」(昭和十一年)の共著の他、杜山居士と

いうペンネームで「昔の奇風俗」(大正十五年)や「芝天と怪火」・「茶堂」(昭和四年)などが掲載されている。例えば「昔の奇風俗」は、八月十五夜に畑の芋を盗んで良いという習俗や七夕を七月六日に行う習俗を報告し、「東京人類學會雜誌」誌上の他県の事例も紹介した上で見解を述べている。

寺石の民俗研究を語る上で、彼が桂井和雄(明治四十年〜平成元年・土佐民俗学会初代会長)に与えた影響も看過ごせない。桂井は、寺石が主催した土佐考古學會の一員であつた。「土佐山民俗誌」で桂井は、土佐山村の菖蒲部落に「菖蒲洞と呼ぶ石灰洞窟があり(中略)、著者はかつてその上方の一小洞窟より弥生式土器の破片を多数発掘した」と述べ、先史に溯る村の生い立ちを示唆している。桂井自身が考古学に携わっていたことが知れると同時に、寺石が桂井の民俗学に時間軸の眼差しをもたらしただであらうことを看取させる。

二人の交流は土佐民俗学会の前身としても興味深い。その当時、意外に学際的な研究が行なわれていたことも知れる。その背景には、黎明期故の分野間の渾然があるだろう。しかし、それだけでなく、寺石が文献・モノ・聞取などから多角的に郷土史を明らかにしようとしていたことも大きな理由であると思われるのである。

平成11年1～3月の催し物

〔企画展〕

平成11年 1.17まで	昔のくらしと道具 —大津民具館の資料から—	大津の昔の姿を知ることにより、高知市近郊農村の生活をふりかえります。
2.11～3.28	土佐・郷土史の父 寺石正路の足跡	郷土史研究者として著名な寺石の貴重なコレクションや彼をめぐる人物・遺跡に多角的に焦点を合わせ紹介します。

〔講演会〕 午後2時～4時 聴講無料 葉書にてお申し込み下さい。(定員100名まで。先着順)

3.6	考古学史の人々と寺石正路	岡本 健児先生(高知県文化財保護審議会委員)
-----	--------------	------------------------

〔講座〕 午後2時～4時 聴講無料 葉書にてお申し込み下さい。(定員100名まで。先着順)

2.27	寺石正路の資料から	主任学芸員 野本 亮
3.20	土佐の考古学史	主任学芸員 岡本 桂典

〔子ども歴史教室〕 *電話などで事前にお申し込み下さい。(先着順)

1.9	こま遊び 10:00～12:00	色々な「こま」をまわしてこま遊びをします。
3.27	親子史跡めぐり 「民話の里めぐり」定員30名	土佐民話の会の市原麟一郎先生の案内で(エンコウ地藏や猿田洞など)日高村を中心に民話の里をバスで巡ります。

〔図書販売情報〕

研究紀要 第7号

600円(送料1冊 310円) B5版 120頁

室戸市羽根正法寺廃寺

「永享七年」銘の鰐口をめぐる

岡本 桂典

〔調査報告〕

平成7年度資料調査員調査報告

筥調査報告集

筥の形態と呼称について

—平成7年度資料調査員筥調査から—

中村 淳子

企画展 「土佐・郷土史の父 寺石正路の足跡」

関係出版物のご案内

研究紀要 第8号 600円(送料1冊 310円) A4版 101頁

寺石正路と宿毛・平城貝塚 岡本健児

土佐考古学史研究(2)

寺石正路と川田信敏～東京帝國大學長谷部言人博士の佐川町

城台洞穴遺跡発掘調査をめぐる～ 岡本桂典

〔調査報告〕寺石正路資料調査報告I

—南方熊楠らとの交流を中心として— 野本 亮

近世武家地主の研究—18世紀土佐佐川地方堀見家について— ...中島義人

〔歴史館日録〕

月 日	出 来 事
平成10年 十月一五日	史跡巡り「室戸市権名のみこし洗い」
十月三〇日	「昔のくらしと道具」企画展開幕
十一月二一日	企画展講座「大津の民具と生活」
十一月二八日	子ども歴史教室
十二月一一日	「土佐の民話 かみしばい」
十二月二二日	「もちつき」

〈お知らせ〉

新年明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願ひします。

(職員一同)

平成十年度、最後の企画展「土佐・郷土史の父 寺石正路の足跡」は、土佐の偉大な考古・歴史学者「寺石正路」の生涯に迫ってみたいと思います。

(岡本・野本)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第30号

平成十一年一月一日

編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783-0009 南国市岡豊町八幡1099-11

TEL 0888(622)2211

FAX 0888(622)2110

開館時間 午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は翌日) 12月28日

1月4日

入館料 通常期(常設展)大人(18歳以上)400円

団体(20人以上)300円

高校生以下は無料

療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳

・障害者手帳所持者とその介助者(1名)

・高知市及び高知県長寿手帳所持者は無料

印刷・(南)西村騰写堂